

「芳草」考―晚唐五代文学の一面―

森 博 行

目次

序文

第一節 各時代における「芳草」の数量

第二節 「芳草」(詩語)と時勢の関係

第三節 「芳草」(香り草あるいは匂い草)の特性

第四節 晚唐五代詩における「芳草」

第五節 「芳草」と楚辭

結 語 「芳草」の文学史的意義

注 釈

付 録

## 序文

唐詩を通説して、晩唐（836—906）から五代〔後梁（907—923）・後唐（936）・後晉（946）・後漢（950）・後周（959）〕・十國〔吳（902—937）・南唐（937—975）・前蜀（891—925）・後蜀（930—965）・南漢（907—971）・楚（907—951）・吳越（907—978）・閩（909—945）・荆南（南平）（907—963）・北漢（951—979）〕にかけて、「芳草」（かおり草）という言葉が、かなり頻繁に現われることに気づいた。今回、唐詩に現われた「芳草」の実態を正式に調査したところ、はたして予想以上に、晩唐から五代にかけて「芳草」という言葉が頻出することが、数量的に確認された。晩唐を代表する詩人・杜牧（八〇三—八五二）の『池州春送前進士蒯希逸』と題する詩の冒頭に、

芳草復芳草 芳草 復た芳草

断腸復断腸 断腸 復た断腸

また晩唐・五代の韋莊（八三六—九一〇）の『旧厓』<sup>2</sup>と題する詩の冒頭に、

芳草又芳草 芳草 又た芳草

故人楊子家 故人 楊子の家

とある。「芳草」という言葉が、冒頭の一句の中に二度も用いられるのは、私が調査したかぎりでは、右のふたつの詩だけである。ある言葉を好んで使用するということは、本来、個人的な嗜好に属することである。しかし、「芳草」に関しては、むしろ時代的な風潮と解釈したほうがいいように思われる。つまり晩唐から五代における「芳草」の使用は、個人的なものを越えた一種の流行現象であったと考えられるのである。

文学作品（韻文）における「芳草」は、『楚辞』以来の古い歴史を持つものであるが、この時代にどうして「芳草」

という言葉が流行したのであろうか。結論的に言えば、それは、晩唐から五代という政情の不安定な時代に生きていた人々が、何か確実なものを求める心理の反映である。しかし、なぜほかならぬ「芳草」であったのか。それは、かおり(匂い)が持っているある特殊な性質によるであらうと考える。

以上の諸点を明らかにするために、先ず最初に清代までの詩における「芳草」の数量的実態を報告し、次に晩唐から五代における「芳草」流行の意味について、最後になぜ「芳草」という点について、具体的に作品を分析することによって、いささか卑見を述べてみたい。

### 第一節 各時代における「芳草」の数量

次頁の表1は、唐以前の「芳草」の調査結果である。表1について補足説明をしておく。縦の欄の「春」以下は、それぞれ「\*草」の「\*」(\*は一字)に相当するもの、「総計」は表以外の「\*草」を含めた全「\*草」の総数、「率」は各作品あるいは各時代における「芳草」の占有率である。横の欄の「率」は各「\*草」の全「\*草」における占有率である。また空白の欄は零を意味する。ここに取り上げた「\*草」は、全時代を合わせて十句以上あるものに限った。なお具体的な詩句の抽出については、今回は一切省略する。さて表1からふたつのが言える。ひとつは、「春草」「秋草」「芳草」の使用数がほぼ同数であり(それぞれ、35、31、30)、そのうえに他を圧して多いということである(四番目の「百草」は、20)。唐以前の「\*草」の総数は36、この三者で30%近く占めている。もうひとつは、「楚辞」における「芳草」使用率の高さである。35%という数値は、後述する如く五代について高い。

『楚辞』における「芳草」に関して、改めて後述するが、「春草」「秋草」「芳草」の使用頻度数が高いのは、これらの言葉が「草」の持つ属性(季節とかおり)を、もっとも一般的な形で表わすものであるからであらう。「芳

(表1)

	詩經	楚辭	先秦	漢	三国	晋	劉宋	南齊	梁	陳	北魏	北齊	北周	隋	合計	率
春		1		1		4	7	4	11	3				4	35	9
秋		1		2	4	8	2	2	7	1		1		3	31	8
芳		6		2	3	7	1	2	6				1	2	30	8
百		5		1	3	6	1	1	3						20	5
緑					1		4	1	6	3			1	2	18	5
細								1	9	2	1		1	2	16	4
蕙				1	1	1	1	7	3	1					14	4
萱	1			2	2	1			5	1			1	1	14	4
蔓	1					2	1	1	7						13	3
芝				3	3			1							10	3
野		1		2	4	1						2			10	3
総計	9	17	0	20	29	51	31	35	127	22	3	4	7	25	／360	
率	0	35	0	10	10	14	3	6	5	0	0	0	14	8		

「草」と類似の言葉に「香草」があるが、「芳草」が「芳草」のようにポピュラーでなかったのは、次の理由によると思う。第一に『楚辭』に「香草」という言葉が使われていないこと。第二に「芳」及び「香」字の意味の違いである。『説文解字』（二下）に「芳は、香艸なり」、更に『説文解字』（七下）に「香は、芳なり」とある。この後者の文に対して段玉裁は次のように説明した。「艸部に芳は香艸なりと曰う。芳は艸を謂い、香は則ち之を汎言するなり。」つまり「芳」字は、香り草に限定されるのに対して、「香」字は広く香り一般を意味するものである。段氏は更に『大雅・生民』の一句「其香始升」を引用した。この「香」は、鄭箋によれば上帝の祭りに備える供物の香りである。

また『楚辭』にはよく知られているように、香り草が固有名詞として出てくる。例えば表1にある「蕙草」の「蕙」。これが「春草」や「芳草」ほど使用されなかったのは、固有名詞はイメージを限定しがちになるため、詩語としては使用しにくかったからだと思われる。この固有名詞という点に関して、記述が前後するが補足すれば、「本草綱目」「草部」第十四卷「草之三」「薰草・零陵香」の「釈名」の項に「香

「草」を載せ、「集解」の項に『開宝本草』馬志の注解を引用して次のように言う。「零陵香は零陵の山谷に生ず。葉は羅勒の如し。南越志に土人の燕草と名づけ、又た薰草と名づく」と云うは、即ち（零陵）香草なり。（一）内は引用者の補足。また同じく「蘭草」の「釈名」の項において、李時珍は次のように言う。「古人、蘭・蕙皆な香草と称すること、零陵香草・都梁香草の如し。後人は之を省し、通呼して香草と為すのみ」。「香草」という語が特定の草を指すことがあったのである。傍証として文学作品から一例、ここに示しておく。「其香草則有薜荔蕙若、薇蕪蓀蓂」（張衡『南都賦』『文選』卷四）。この場合、「香草」の語それ自体は、固有名詞ではないけれども、「香草」というとき連想されるのが、「薜荔」以下の特定されるかおり草であることは、注意すべきである。『本草綱目』「草部」第十四卷「草之三」では、「芳草」類と総称して五十六種が収録され、「香草」と區別しているのである。

ともかく「芳草」が唐代になって突然現われたものでなく、「春草」や「秋草」などとともに、既に詩語として用意されていたということは、銘記しておかなければならない。ただ「秋草」は後代になると、「春草」に比べても著しく減少するので、以下の説明において、「芳草」を他の「\*草」と比較して考えるとき、便宜上、「春草」を比較の対象にする。なお、右の表1によれば、色彩を表わす語は、「緑草」が一番多いが、唐代においては「青草」が大多数である。しかし、この「青草」は「春草」・「芳草」の使用頻度に比べて、はるかに及ばない。

次に唐代を見てみよう。文学史の常識に従って、初唐・盛唐・中唐・晩唐の四時期に区分し、それに五代を加えて、「芳草」の数量を表にしてみた。左の表2の通りである（いちいち記さないが、索引のあるものは利用した。また、『全唐詩』（復興書局印行本 中華民国五十六年十月再版）の配列に従ったので、通常の区分と異なる詩人がいる。更にまた今回の調査は、「以下無考」注記のある第十一函第七冊以降の詩人は、整理の都合上すべて除外した。だから皎然・貫休・齊己など、かなり多くの作品を残している僧侶たちも対象から外すことになった。しかし、私の調査では彼らを除外しても大勢に影響はない。左の表2について補足説明しておく。これは、『全唐詩』に収録された詩人の作品のうち、「\*草」（\*は一字）とい

(表2)

	芳草	*草	占有率	詩人数
初唐	3	22	14	2
盛唐	46	437	11	10
中唐	68	537	13	21
晩唐	106	361	29	19
五代	26	38	68	2
合計	249	1395	18	54

(表3)

	芳草	*草	占有率	詩人数
A	117	996	12	33
B	132	399	33	21

(A-初唐・盛唐・中唐の合計、B-晩唐・五代の合計)

(表4)

	春草	*草	占有率	詩人数
初唐	4	22	18	2
盛唐	87	437	20	10
中唐	58	537	11	21
晩唐	44	361	12	19
五代	0	38	0	2
合計	193	1395	14	54

う熟語が、詩題も含めて一人の詩人において十句以上あるものを選び出し、その中で「芳草」が占める割合(占有率)を示したものである(参考までに「付録」の個人別表に『全唐詩』中のすべての使用数を拾い上げておいた。「その他」の項)。この表2によって、唐代における「芳草」の数量的推移の実態は一目瞭然であるが、「初唐」「盛唐」「中唐」を(A)グループ、「晩唐」「五代」を(B)グループとして表を作り直すと、右の表3のようになる。「芳草」の頻度に関して言えば、(B)グループは(A)グループの実に三倍近くである。しかも大事なものは、「付録」の個人別表を見ればわかるように、杜牧・劉滄・羅鄴・韋莊・李中・徐鉉など、晩唐五代において多くの詩人に40%以上の高い占有率が見られること、それに対して中唐以前には、皇甫冉一人を除いて、40%を越えるものがまったくいないということである。序文において、「個人的なものを越えた」、「時代的な風潮と解釈したほうがいいように思われる」と述べた所以である。

これが通常の事態でないことを確認するために、唐詩に現われた「春草」と比較してみよう(右の表4)。表4にお

(表5)

	芳草	*草	占有率	詩人数	春草	占有率
北宋	91	613	15	17	39	6
南宋	67	548	12	11	49	9
全宋	158	1161	14	28	88	8
金	1	62	2	4	10	16
元	67	513	13	16	44	9
明	123	682	18	10	40	6
清	133	955	13	17	83	8

は唐以前の総数量にも当てはまる(17%)。それに比べて唐代の「芳草」の占有率は、宋代以降とあまり変わらないから(表2)、唐代は概均32%)。晩唐と五代を除けば、唐代の「芳草」の占有率は、宋代以降とあまり変わらないから(表2)、唐代は概して「春草」の使用率が高いといえる。

以上、歴史的に眺めて、晩唐から五代における詩に「芳草」という語が、かなり高い頻度で使用されていることが理解できたであろう。ところで、晩唐から五代における文学で無視することができないのは、この時代に急速に発達した詞である。一応参考までに、詞における「芳草」(併せて「春草」)の数量的実態を報告しておこう。資料は、『尊前集』と『花間集』である(左の表6)。

いて、「春草」の場合は、唐一代を通じて、平均値の14%からあまり上下しないで、たいへん安定していることが分かる。五代が極端に少ないのは(「付録」の個人別表を併せて参照)、「芳草」が逆に極端に多いためである。

更に、上述したことが唐一代に限られた現象であることを、次の宋代以後、清代までと比較することによって、確認しておこう。ただし、対象とした作品が基本的に『四部叢刊初編』に収録されているものに限られているので、厳密さに欠ける恨みがあることを断っておく(「付録」の個人別表に\*印のついている詩人は、『四庫全書』などに収録されているもの)。なお、宋代を北宋と南宋に分けたのは便宜的なものである(上の表5)。

どの時代も20%を越えることがなく、金代を除けば、12%から18%の間でいたい一定している。なお「付録」の表9を見れば分かるように、「芳草」と「春草」の占有率を合計すれば18%から24%の間でいたい一定しており、この数字

(表6)

	芳草	*草	占有率	詩人数	春草	占有率
尊前	6	18	33	10	4	22
花間	23	44	52	13	2	5

(表7)

	芳草	*草	占有率	詩人数	春草	占有率
A	1	11	9	6	3	27
B	5	7	71	4	1	14

(A-尊前集における盛唐・中唐詩人、B-尊前集における晚唐・五代詩人)

(表8)

*風	東風	春風	清風
142	23	17	14
占有率	16	12	10

*雲	青雲	白雲	碧雲
92	19	19	5
占有率	21	21	5

*雨	煙雨	風雨	暮雨
95	11	9	7
占有率	12	10	7

(調査対象=羅邨・韋莊・李中・徐鉉)  
(個人の最高占有率は羅邨 東風40%)

『花間集』の場合は、作者すべて晚唐から五代の人達であるが、『尊前集』の場合は、盛唐の李白から始まって中唐詩人も含まれている。そこで盛唐と中唐をひとつのグループ(A)、晚唐と五代をもうひとつのグループ(B)にして表を作り直すと、左の表7のようになる(なお、「付録」の表7補参照)。表7を見れば、晚唐から五代になると、「芳草」が俄然増えていることが分かる。つまり晚唐から五代の詞においては、「芳草」が圧倒的に多数を占めているのである。詩が詞に影響を与えたのか、それとも逆なのか、現在のところ私の考えはまだまだとまっていないが、少なくとも次のことだけは間違いない。晚唐から五代における韻文学作品(賦を除く)には、「芳草」が好んで使われた。



なお、参考までに「\*草」以外の語について恣意的なものに過ぎないが、「\*雨」・「\*雲」・「\*風」を取り上げ、この時代、特に目立って「芳草」使用率の高い羅鄴・韋莊・李中・徐鉉に限り調査したところ、右の表8のような結果を得た。この調査によっても、「芳草」の集中がいかに高いものであるか、よく分かる。

最後に、この時代になって初めて、羅鄴・黃滔・孫勣・廬載らの詩に『芳草』と題する作品が現われたことを付け加えておく(ただし、中唐の陸贄に『賦得御園芳草』と題する作品が一例ある。それ以前は、例えば盛唐の張旭の『春草』など)。

## 第二節 「芳草」(詩語)と時勢の関係

各時代における「芳草」の数量的実態は明らかにになった。次に考えるべき問題は、晚唐五代における「芳草」の頻出は、一体いかなることを意味するのか、ということである。私は次のように考える。

一般的に言って、一人の人物や一つの事物に対する固執あるいは集中は、その人物や事物に対する絶対化を意味する。ところで、ある一人の人物あるいは一つの事物に対して絶対化を求めるのは、何か確実な、心の拠り所となるものを求める心理の反映である。そして、そういうものを求めるのは、客観的な状況が逆に不確実で、不安定なものであり、こういう中で人々が心に不安を抱いているからである。周知の通り、晚唐は唐王朝が統一王朝としての支配力を完全に喪失し、やがて滅亡に向かっていく時代であり、五代に至っては、わずか五十年ほどの短期間に五つもの王朝が次々と交代し、またこの間、南方においては晚唐の藩鎮勢力をほぼそのまま受け継いだ形で、十国が独立王国の様相を呈して、中国本土は四分五裂し、いっこうに収拾のつかない、政治的にきわめて不安定な時代であった。宮崎市定博士の言葉を拝借すれば、「民族の試練」の時代であった。もちろん中には南唐や蜀においてのように、部分的

に高度に発達した文化もあった。しかしながら、政治的社会的にはたいへん不安定であった。これは中国史上、空前の現象である。歐陽修の言葉を用すれば「甚だしきかな、五代の際は。君君臣臣父子子の道は乖り、而して宗廟朝廷人鬼は皆な其の序を失う。斯れ乱世と謂う可き者か。古自り未だ之れ有らざるなり」。このような不安定な時代において、順調に誤りなく身を処して生きてゆくのは、不可能に近かった。五朝・八姓に仕えた馮道の評価をめぐって、司馬光は『資治通鑑』（巻二百九十一「後周紀二」）の中で、次のように記している。

或ひと以為えらく、唐室の亡びて自り、群雄力争し、帝王興廢す。速き者は十余年、近き者は四三年、忠智有り  
と雖も、將た之を若何せん。是の時に當り、臣節を失いし者は（馮）道一人に非ず、豈に独り（馮）道のみ罪せ  
んや、と。臣愚以為えらく、忠臣は公を憂うること家の如く、危を見て命を致し、君に過ち有れば則ち強諫力争  
し、国の敗亡すれば則ち節を竭して死を致す。智士は邦に道有れば則ち見れ、邦に道無ければ則ち隠れ、或は迹  
を山林に滅し、或は下僚に優游す。今、（馮）道、尊寵は則ち三師に冠たり、權任は則ち諸相に首たり。国存す  
れば則ち依違拱嘿し、位を竊み素餐し、国亡ぶれば則ち全きを圖りて苟免し、迎謁勸進す。君は則ち興亡踵を接  
するに、（馮）道は則ち富貴自如たり、茲れ乃ち奸臣の尤なり。安んぞ他人と比を為すを得んや。

馮道をどう評価するかはともかく、彼は非常に稀な例外であった。清の趙翼は『廿二史劄記』（卷二十一「五代藩  
郡皆用武人」）において、次のように記している。「五代諸鎮節度使、未だ勲臣武將を用いざる者有らず。遍く薛・歐  
二史を検ぶるに、文臣の節度使為る者は、惟だ馮道の暫く同州に鎮し、桑維翰の暫く相州及び秦寧に鎮するのみ」。  
ところで五代のみならず晩唐時代も「邦に道無」き時代であり、多くの官吏は「下僚に」沈淪していた。しかし、司  
馬光が言うように、「下僚に優游」することは、誰にでもできることではなかった。人々の多くは、不平と不満と不  
安を抱きながら、宮仕えのため各地を奔走していた。そして当然彼らには、司馬光の批判にもかかわらず、彼らの倫  
理的根拠があった。「其の欲する所に非ざるなり、已むを得ざるなり」（徐鉉『出処論』『徐公文集』卷二十四）。

このような時代状況とまるで反比例するかのごとく、「芳草」が集中化に向かって急上昇していくのは、詩語というものにも、上述したような心理、つまり何か確実な心の拠り所を求めようとする強い願望が、反映されることがあるからではないだろうか。次に引用する作品は、羅鄴の『賞春』(一作『芳草』、一作『春遊鬱然有懷賦』)と題する詩である。

芳草和煙暖更青 芳草 煙に和し 暖かくして更に青し

閑門要路一時生 閑門にも要路にも 一時に生ず

年年点検人間事 年年 人間の事を点検するに

唯有春風不世情 唯だ春風の世情にあらざる有るのみ

最後の一句は、ただ「春風」だけは、世間の人情とちがいで、「閑門」と「要路」とを差別することなく、あらゆる階層の人に訪れるという意味であるが、第一聯から考えて、「芳草」も「春風」と同じであることは明らかである。春がめぐり来れば必ず芽生える「芳草」は、状況の違いに関係なく確実な存在である。職を求めてはるか遠く北のかた「單于の牙帳」(北方の節度使を指す)にまで出かけていった羅鄴について、辛文房は次のようにコメントした。<sup>10</sup> 鄴は素と資英有り。筆端は超絶し、其の気宇も亦た諸人の下に在らず。初め箕裘の訓無けれども、頓に門風を改め、興を音韻に崛て、誉れを当時に馳せるは、易き事に非ざるなり。而れども前に跋れ後ろに寔き、絶域に無聊たり。独り其の命の薄きを奈何せん。孔子曰く、才難し、と。信に然り。

「五代是右武之世」(五代は武を尊ぶ時代)といったのは、鄭学稼氏であるが、武人の重用は逆に言えば、文人の軽視にはかならず、文人が軽視されるのは、朝廷の威令が行われない乱世であるからである。この事情は晩唐も同じである。文の人・羅鄴はしばしば科擧に応じたが、結局、合格できなかった。<sup>12</sup>「名場成ること無く、一題として以て怨みを寄せざる無し」。これは、明・胡震亨『唐音癸籤』(卷八)の文である。胡震亨のこの文には、「治世の音

は、安にして以って楽、其の政は和なり。乱世の音は、怨にして怒、其の政は乖るなり。亡国の音は、哀にして以て思、其の民は困しむ（『毛詩大序』）が意識されていたであろう。「乱世の音」を發した、「命薄き」羅鄴は、中国の全詩人を通じて、もっとも「芳草」を好んだ人物である（『付録』の個人別表参照）。このような彼が「\*草」を使用するとき、「芳草」に固執したのは、実生活では満たされぬ確実で安定したものを、強く求める彼の心理の反映である、と私は考える。

右に述べたことは、羅鄴だけのことでない。五代の孫魴（南唐）・扈載（後周）の『芳草』と題する詩において、それぞれ次のように歌われている（このふたつの詩はどちらも今回の調査の対象外の作品である）。

孫魴『芳草』<sup>13</sup>

何処不相見 何れの処か 相見ざる

煙苗捧露心 煙苗 露心を捧ぐ

萋萋綠遠水 萋萋として 遠水に緑に

萋萋在空林 萋萋として 空林に在り

野吹閑搖澗 野吹 閑かにして揺すること澗く

遊人醉臥深 遊人 酔いて臥すること深し

南朝古城裏 南朝 古城の裏

碑石又応沈 碑石も又た応に沈むべし

扈載『芳草』<sup>14</sup>

幽芳無処無 幽芳 処として無きこと無し

幽処恨何如 幽処 恨みは如何

倦客傷帰思 倦客 帰思に傷むとき

春風満旧居 春風 旧居に満つるならん

晚煙迷香靄 晚煙 香靄に迷い

朝露健扶疎 朝露 扶疎に健なり

省傍靈光看 省て靈光に傍いて看たり

残陽少碑区 残陽 少碑の区

右のふたつの詩の第一句は、ともに「芳草」はどこにでもある、ということをお歌ったもの。羅鄴の詩を含めて、これらの作品には「離騷」の「何れの所か独り芳草無からん、爾は何ぞ故宇を懐うや」をふまえているが（第五節参照）、ここで注意しなければならないのは、詩題が『芳草』となっていて、そして彼らにとって「芳草」は、どこにいても間違いなく存在する確実なものであった、ということである。これらふたつの詩がいつ作られたのかは分からない。ただはっきりしていることは、孫鮪の作品に「野吹 閑かにして揺すること潤く、遊人 酔いて臥すこと深し」、  
 題載の作品に「倦客 帰思に傷むとき、春風 旧居に満つるならん」と歌われている通り、この詩を作ったとき、兩人とも旅の身の上であった、そして恐らく精神的には不安な状態に置かれていた、ということである。題載の詩の最後の一聯は、かつて夕日の中、魯の曲阜（少碑の都であったとされる）で見た「芳草」を思い出したのであろう。  
 「芳草」だけは、今も昔も、どこにいても変わらぬ。孫鮪の尾聯も同断である。

もっとも、「芳草」が頻繁に使用されたことについて、マンネリ化という一面もあることは否定できない。徐鉉は『全唐詩』の中では、五代の詩人として扱われているが、宋王朝にも仕えた人であり、この論稿が対象としている詩人の中でもっとも晩期に属する人である。彼も「芳草」をかなり高い比率で使用しているが（「付録」の個人別表参

照)、彼の『登甘露寺北望』<sup>16</sup>と題する詩は次のようなものである。

京口潮來曲岸平 京口 潮來りて 曲岸平かに

海門風起浪花生 海門 風起って 浪花生ず

人行沙上見日影 人は沙上を行きて 日影を見

舟過江中間櫓聲 舟は江中を過ぎて 櫓聲を聞く

芳草遠迷楊子渡 芳草 遠く迷う 楊子渡

宿煙深映広陵城 宿煙 深く映ず 広陵城

游人郷思応如橘 游人の郷思 応に橘の如くなるべく

相望須含両地情 相望めば 須らく両地の情を含むべし

徐鉉は揚州広陵の人であり、詩題の「甘露寺」は京口（江蘇省鎮江市）の北固山上にある寺。作者は「甘露寺」から長江の対岸にある故郷・揚州の町を、北に向かってはるかに眺望しているのであり、第三句から第六句まではそのときの様子を詠じたものである。このうち、第三句と第四句が、視覚（「見日影」と聴覚（「聞櫓聲」）の組み合わせであるということを考えれば、第五句と第六句は、嗅覚（「芳草」と視覚（「宿煙」）の組み合わせであるといえる。ところで第五句において、「楊子渡」を「北望」して「芳草」というのは、よほど強烈な匂いを放つ草か、あるいは犬のような特別に鋭い嗅覚を持った動物でないかぎり、感覚的にそぐわないのではないかという印象を受ける。「甘露寺」から「揚子渡」までは、人間の嗅覚の許容範囲を越えた相当の距離があるからである。しかし、実際は次のとおりである。優れた前例が現われると、それが典型化されることは、よく見られる現象である。劉安が『招隱士』（『文選』卷三十三）に「王孫遊びて帰らず、春草生じて萋萋たり」、また『古詩十九首・其六』（『文選』卷二十九）に、「江を渉りて芙蓉を采る、蘭沢には芳草多し。之を采りて誰に遺らんと欲する、思う所は遠道に在り」と詠

じて以来、「春草」あるいは「芳草」と表現して、故郷を思いしのぶすがとすることが、詩においてよく行なわれた。「芳草」の例を一例引用する。

長安遠千里 長安 邈として千里

日夕懷双闕 日夕 双闕を懷う

已是洞庭人 已にはれ洞庭の人なるに

猶看瀟陵月 猶お看る 瀟陵の月

誰堪去鄉意 誰か堪えん 郷を去るの意に

親戚想天末 親戚は天末を想わん

昨夜夢中歸 昨夜 夢中に歸り

煙波覺來闊 煙波 覺め來たれば闊し

江臯見芳草 江臯に芳草を見

孤客心欲絶 孤客 心は絶えんと欲す

豈訝青春來 豈に青春の來たるを訝らんや

但傷經時別 但だ時を經し別れを傷むなり

長天不可望 長天 望む可からず

鳥与浮雲没 鳥は浮雲とともに没す

これは、劉長卿の『初至洞庭懷瀟陵別業』<sup>18</sup>と題する作品である。彼は「江臯に芳草を見」て、「孤客 心は絶えんと欲す」と、故郷（瀟陵の別業）を思い起こし、悲嘆にくれているのである。「孤客」はもちろん作者を指す。劉長卿と同様、徐鉉は『登甘露寺北望』詩において、望郷の思いを「芳草」に託したのであって、このとき彼には、嗅覚

と視覚の組み合わせという意識は、恐らくなかった。徐鉉が「芳草」と表現したのは、この時代、「芳草」が人々の無意識の領域にまで侵入し、一種流行語のように使われていたからであると、私は考える。「説文学」に造詣が深い徐鉉は、文人というより学者肌の人物であるが、典型を安易に踏襲すること、悪く言えばマンネリズムは、個人的才能の問題というよりも、やはり変化を嫌い、安定したものを願う時代的傾向が生み出したものと考えるべきではないだろうか。徐鉉は創作ということについて、『成氏詩集序』(『全唐文』卷八百八十二)の中で、次のように言った。

若しくは夫れ嘉言麗句、音韻天成するは、徒だに積学の能くする所なるのみに非ず。蓋し神助なる者有るなり。羅君章・謝康樂・江文通・邱希範、皆な影響の夢寐に発する有り。

これは、すぐれた文章や詩というものは、学問を積み重ねるだけで作ることができるといふものではない、「神助」つまり超自然の神霊の助けが必要であると述べているわけだが、羅君章・謝康樂・江文通・邱希範は、すべて中国文学史上、著名な詩人たちであり、彼らは夢の中で啓示を受けたり、名句を思いついたという伝説が伝わっている。謝康樂つまり南北朝時代の詩人・謝靈運の例をここに紹介しておこう。

梁・鍾嶸『詩品』「中品・謝惠連」

謝氏家録に云えらく、康樂は惠連に対する毎に、輒ち佳語を得。後、永嘉の西堂に在りて、詩を思ふも竟日就らず。寤寐の間、忽ち惠連を見るに、即ち「池塘 春草を生ず」を成す。故に常に云えらく、「此の語は神助有り、吾が語に非ざるなり」と。(訓詁は興膳宏『文学論集 中国文明選13』による)

「池塘 春草を生ず」の一句は、謝靈運の『登池上楼』詩(『文選』卷二十二)中のもので、この句の妙は、胡応麟『詩藪』(外編卷二)によれば、自然に口をついて出てきたところにある。既述した通り、徐鉉は『説文解字』に、たいへん造詣の深い学者である。この彼をして上述のように言わしめているのである。「神助」というものが、いか



に気まぐれなものであるか、徐鉉はよく知っていた。彼が揚子江の北岸にある故郷を眺望したとき、「芳草 遠く迷う 揚子渡」と表現したのは、「神助」が彼の夢の中で囁いた言葉が、謝靈運が得た「春草」ではなくて、この時代の土壤にはびこっていた「芳草」だったからであると、私は考えるのである。なお、付け加えれば、劉長卿の場合は、「見」と表現されているが、「芳草」の香りを嗅いでいたであろう。

ところで、先程の羅鄴の詩に歌われている「春風」が、類似の意義をもちながら「芳草」のように高い比率で使用されることのないことは、既に述べた(36頁の表8)。なぜ「芳草」に人々は心の拠り所を求めたのであろうか。これが次に考えなければならない問題である。この点について考える前に、先ず次の二つの詩を引用しておこう。

天北天南遶路辺 天北 天南 路辺に遶る

托根無処不延綿 根に托して 処として延綿ならざるは無し

萋萋総は無情物 萋萋 総て是れ無情の物

吹緑東風又一年 緑を吹く東風 又た一年

行杯酌罷歌声歇 行杯 酌み罷り 歌声 歇み

不覚前汀月又生 覚えず 前汀に月の又た生ずるを

自是離人魂易断 自らはれ離人の魂は断たれ易く

落花芳草本無情 落花 芳草 本 無情

前者は、晚唐・唐彦謙の『春草』<sup>19</sup>、後者は五代・李中の『贈別』<sup>20</sup>と題する作品である。李中の場合、彼の作品中に「春草」は一例もなく、圧倒的に「芳草」が多い。唐彦謙の場合は、「春草」は二例(ともに詩題)、「芳草」は三例(ともに詩句)である(「付録」の個人別表参照)。問題は、草木は「無情」であるということ表現するのに、

「春草」も「芳草」もどちらも使用されているということである。「無情」であるということは、別の見方をすればそれはつまり、「閑門」と「要路」とを差別することなく、春になればどこにでも一斉に芽生えるということであるが、このような草が、「春草」と表現されたり、あるいは「芳草」と表現されたりする。にもかかわらず時代全体としての結果は、「春草」ではなくて「芳草」に集中したのは、どうしてなのであるか。章を改めて、私の考えを述べることにはしたい。

### 第三節 「芳草」(香り草あるいは匂い草)の特性

第二節において述べたとおり、詩人が「芳草」という言葉を選択したとき、必ずしも香り(匂い)を意識しているわけではなかった。しかし、例えば「春草」が単に季節(時間の循環)を表わす語、また「青草」が視覚に訴える語であるのに対して、「芳草」という言葉からすぐ連想されるのは、やはり何といっても香り(匂い)であろう。「芳草」という言葉が使われるとき、それが香り(匂い)のいい草であることは間違いない。ただ、具体的にいかなる香り草(時に草の花)を指して歌われているのか、多くの場合分らない。

ところで一般的に草花のいい香り(匂い)は人の心理や生理に、どのような作用を引き起こすのであろうか。香り(匂い)に関する専門家の意見を聞いてみよう。

嗅覚はなによりもまず、休息の欲望が生じたときに刺激されるものでなければならぬ。

一般的に言えば「静かで落ち着いた場所」、こうした所ではせひとも花か馨しい葉のついた植物が近くになければならぬ。

ある種の野の花の強烈な匂いは陶酔を伝える役目をすることもある。つまり女性の表情と花との類似性が暗示す

るように、それは性への快樂の誘いである。

これは、アラン・コルバン著 山田登世子・鹿島茂訳『においの歴史』（新評論 一九八八年）から抜き書きしたものである（傍線は引用者。以下同じ）。また藤巻正生等編集『香料の辞典』（朝倉書店 一九八〇年）の中に、次のようにある。

悪臭を嗅ぐと頭痛感や頭痛を起こしたりいらした気分陥り、活動意欲を失う。逆によい匂いを嗅ぐと気分が爽快となる。このように匂いは人の精神活動に影響を及ぼすが、何か一つの仕事に集中しているときはそれほどなくても、仕事から離れて家庭に帰り、くつろいだ気分するときには影響は大きくなる。

次に「芳草」に関して、中国文学の専門家の見解はどうか。朱自清は『古詩十九首・其六』（『文選』卷二十九）

涉江采芙蓉 江を渉りて 芙蓉を采る

蘭沢多芳草 蘭沢には 芳草多し

采之欲遺誰 之を采りて 誰に遺らんと欲する

所思在遠道 思う所のひとは 遠道に在り

還顧望旧鄉 還顧して 旧郷を望めば

長路漫浩浩 長路は漫として 浩浩たり

同心而離居 同心にして 離れ居む

憂傷以終老 憂傷して以って 老いを終えんとす

を解釈したとき、次のように説明した<sup>21</sup>。

采芳草送人、本是古代的風俗（芳草を采って人に贈るのは、もともと古代の風俗である）。△詩經・鄭風・溱洧▽  
 篇道：「溱与洧、方渙渙兮、士与女、方秉苜兮。」△毛伝▽：「苜、蘭也。」△詩▽又道：「且往觀乎、洧之外

洵許且樂。維士与女、伊其相讓、贈之以勺藥。」鄭玄《箋》說士与女分別時、「送女以勺藥、結恩情也。」（鄭玄の《箋》は、男が女と別れる時「女に勺藥を贈って、恩情を結ぶ」のであると言う。《毛伝》說勺藥也是香草。《楚辭》也道：「采芳洲兮杜若、將以遺兮下女」（中略）可見采芳相贈、是結恩情的意思、男女都可、遠近也都可（芳を采って相手に贈るのは、恩情を結ぶという意味であり、男女ともにかまわないし、遠くても近くてもかまわない、ということがわかる）。

更にまた、村上哲見氏は、李煜の『喜遷鶯』詞の一句

夢回芳草思依依 夢より回れば芳草に思いは依依たり

を解釈されたとき、「芳草」という語は、「詞では恋人を偲ぶよすがとしてよく用いられる」と説明された。<sup>22</sup>

以上、これらの学者の見解を私流に言いなおせば、香り（匂い）というものは、

1、人の心が弛緩しているときに、より強い作用を引き起こし、心を落ち着かせる。

2、人の心を陶醉させることがある。

3、異性を連想し、異性間を取り結ぶ働きを持っている。

などということになる。要するに一言でいえば、ある種の心的慰安をもたらすということであるが、この論稿の中心的論拠である「確実なものを求める心理」と深く関わる1の点については、第四節において詳しく検討するので、ここでは2及び3について、文学作品を材料に大まかな素描をしておこう。

山上有山婦不得 山上に山有り 帰ることを得ず

湘江暮雨鷓鴣飛 湘江 暮雨 鷓鴣飛ぶ

薜蘿亦是王孫草 薜蘿も亦た是れ王孫草

莫送春香入客衣 春香を送りて 客衣に入らしむること莫れ

これは、晩唐の孟暹の『閨情』<sup>23</sup>と題する詩である。香り草である「藤蕪」には、「当帰草」の別名があるといい、「王孫草」は、劉安の『招隱士』「王孫 遊びて帰らず、春草生いて萋萋たり」に基づくものであるから、さしずめ「不当帰草」とでも呼ぶべき草である。<sup>24</sup>詩中には「芳草」という言葉は使われていないが、「春香」（春の草の香り）が「客衣」つまり旅中にあるあの人の衣に入り、「不当帰草」の「春香」に感染して、帰ってこないことのないようにと歌われている。草のかおりには、人を麻葉のように酔わす力があるのである。右の詩が男（夫）を思ふ女（妻）の立場で歌われていることは言うまでもない。

また唐代の作品ではないが、『子夜歌四十二首』<sup>25</sup>に次のような歌がある。

落日出門 落日 前門を出て

瞻矚見子度 瞻矚して 子の度るを見る

冶容多姿鬢 冶容 姿鬢多く

芳香已盈路 芳香 已に路に盈つ

芳是香所為 芳は是れ香の為す所

冶容不敢当 冶容 敢て当らず

天不奪人願 天は人の願いを奪わず

故使儂見郎 故に儂れをして郎に見えしむ

第一首は男の作、第二首は男に答えた女の作であるといわれる。<sup>26</sup>男の心を引きつけるのは、女の「芳香」。それに對して、女が言うことには、「芳りは是れ香（草）の為す所」と。男を引きつける「芳香」は、女性の香りでもあり、草の香りでもあるのである。

次に「芳草」という言葉の特性を巧みに活用した作品を紹介しておこう。

此地曾經翠輦過 此の地 曾經て 翠輦過ぎ

浮雲流水竟如何 浮雲 流水 竟に如何

香銷南国美人尽 香は南国に銷えて 美人尽き

怨入東風芳草多 怨は東風に入りて 芳草多し

殘柳宮前空露葉 殘柳 宮前 露葉空しく

夕陽川上浩煙波 夕陽 川上 煙波浩たり

行人遥起広陵思 行人 遥かに起こす 広陵の思い

古渡月明聞棹歌 古渡 月明らかにして 棹歌を聞く

これは、晩唐・劉滄の『経煬帝行宮』と題する詩である。亡国とともに消え去った「美人」の「怨」の「香」が、「東風」に乗じ、「芳草」となって生まれ出たというのである。「芳草」から「美人」という連想が生んだ、さまざまの一聯である。なお、序文に引用した韋荘の『旧居』の後半に、「皓質 残雪を留め、香魂 断霞を逐う。知らず何れの処の笛、一夜 梅花に叫ぶは」とうたわれていることから考えると、「旧居」の「楊子の家」は、彼がひいきにでもしていた女性の住居であろうか。いずれにしても、韋荘は「芳草」を前にして、亡くなった女性を憶っているのである。

最後に、「芳草」が人を酔わせるものであると考えられていたことについて、明らかな証拠を挙げておく。盛唐・李頎の「送崔侍御赴京」<sup>28</sup>と題する詩の最後の四句に、次のように歌われている。

送君暮春月 君を送る 暮春の月

花落城南隄 花は落つ 城南の隄

惜別醉芳草 別れを惜しんで 芳草に酔い  
 前山勞夢思 前山 夢思を勞す

第四節 晚唐五代詩における「芳草」

さてここで、第二節と第三節に述べたことを念頭に置きながら、晚唐五代において「芳草」を好んで詠んだ詩人の作品をいくつか取り上げて、見ていくことにする。先ず杜牧。「芳草 復た芳草」と詠じた杜牧は、いわば「芳草」流行の先駆けをした人物である（『付録』の個人別表参照）。このような彼に『茶山下作』<sup>29</sup>と題する詩があり、次のようなものである。

春風最窈窕	春風は最も窈窕
日晚柳村西	日は晩る 柳村の西
嬌雲光占岫	嬌雲 光りて岫を占め
健水鳴分溪	健水 鳴りて溪を分かつ
燎巖野花遠	巖を燎くがごとく 野花遠く
憂瑟幽鳥囀	瑟を憂らすがごとく 幽鳥囀く
把酒坐芳草	酒を把りて芳草に坐し
亦有佳人携	亦た佳人の携える有り

この詩は、大中五年（八五二、四十九歳）の作<sup>30</sup>。詩題にある「茶山」は、「題茶山」詩（卷三）の原注によれば宜興（常州に属する）にある。馮集梧が李夫人を詠じた「北方有佳人、絶世而独立」の詩句を注引するとおり、この

とき杜牧が「携え」ていた「佳人」は女性（恐らく官妓）と判断してよい。彼は、「芳草に坐し」てうっとりしていたに違いない。しかし、杜牧はもう一方では、『洛中送冀处士东游』詩<sup>31</sup>において

我作八品吏 我は八品の吏と作り

洛中如繫囚 洛中に繫囚せらるるが如し

と、詠じていることを忘れるべきでない。この詩は開成元年（八三六、三十四歳）、彼が洛陽で監察御史をしていたときの作品である。<sup>32</sup>「その秀れた才学の自信と、光輝ある家柄の出身でおのれがあるという誇り」<sup>33</sup>を抱いていた彼は、地方回りの役人生活に、全くうんざりしていた。役人生活は不安定で、囚われの身のようにであるが、「芳草」は春になれば、いつでもそこにあり、彼の心をのびのびと、くつろがせてくれるのである。

また韋莊（八三六—九一〇）も「芳草」を好んで歌った詩人である（「付録」の個人別表参照）。彼は十国の前蜀の宰相にまでなった人物であるが、この世を「幻の如く泡の如し」と詠嘆していた。『遣興』詩<sup>34</sup>。

如幻如泡世 幻の如く 泡の如き世

多愁多病身 愁い多く 病い多き身

乱来知酒聖 乱来りて 酒の聖なるを知り

貧去覚銭神 貧去りて 銭の神なるを覚ゆ

異国清明節 異国 清明の節

空江寂寞春 空江 寂寞たる春

声声林上鳥 声声 林上の鳥

喚我北帰秦 我に喚んで北のかた秦に帰れと

彼はもともと、京兆杜陵の人。<sup>35</sup>「清明節」は、一家うちそろって郊外で遊んだりする日である。この詩は、文徳元



年八八八、五十三歳、婺州にいたときの作であろうか。<sup>36</sup>「異国」にいる彼には、鳥の鳴声も望郷の思いをつのらせるものであった。「秦に帰れと」鳴く鳥は、不如帰（ほととぎす）であろう。ところで彼が「芳草」を歌った作品に次のようなものがある。詩題は『残花』<sup>37</sup>。

江頭沈醉泥斜暉 江頭に沈酔し 斜暉に泥す

却向花前慟哭婦 却って花前に向いて慟哭して婦る

惆悵一年春又去 惆悵す 一年 春の又た去るを

碧雲芳草兩依依 碧雲 芳草 両つながら依依たり

「依依」は微妙な陰影を帯びた言葉であるが、この場合、韋莊は「芳草」のかおりに吸い寄せられ、去り難い状態にあると思われる。俗にいう「依依不舍」。この世を幻と嘆いていた彼にとっても、「芳草」は、彼の心を引きつける存在であった。なお、「芳草」とともに「依依」たるものである「碧雲」が、「芳草」のように集中的に使用されることのないことは、既に見た(36頁の表8)。韋莊にはまた、次のような作品がある。『春愁』<sup>38</sup>。

自有春愁正断魂 自ら春愁の正に魂を断つ有り

不堪芳草思王孫 堪えず 芳草に王孫を思うに

落花寂寂黄昏雨 落花 寂寂 黄昏の雨

深院無人独倚門 深院 人無く 独り門に倚る

范文瀾氏が、この詩を意識して直接指摘したわけではないが、次のように言った。<sup>39</sup>「唐朝風教廢弛、習俗淫靡、晚唐淫風愈盛、詩人沾染陋俗、并不諱言情欲、不過、多用曲折隱約的語言來談情、往往与寄興于美人香草的文意（爲芳草以怨王孫、借美人以喻君子）<sup>40</sup>混淆難分」（唐朝は風教が廢弛し、習俗は淫靡、晚唐には淫風はいよいよ盛んになり、詩人は陋俗に沾染し、けっして情欲を言うことを諱まない、ただし、多くは曲折隱約の言葉で情を談じ、

往々興を美人香草の文意に寄せ、<sup>11</sup>「芳草」と為して以って王孫を怨み、美人に借りて以って君子に喩う、混淆して分かり難し。右の詩も、その真の意図がどこにあるのか、はっきりとは把握し難い。ただ言えることは、この詩が醸し出す雰囲気には、詞の世界に通じるところがある、ということである。韋莊は詞の名手でもある。この詩が詞を連想させても不思議でない。彼の『小重山』<sup>11</sup>と題する詞の後関は次のとおりである。

歌吹隔重閣 歌吹 重閣を隔つ

繞庭芳草綠 庭を繞る芳草は緑なり

倚長門 長門に倚る

万般惆悵向誰論 万般なる惆悵 誰れに向かってか論ぜん

凝情立 情を凝らして立つ

宮殿欲黄昏 宮殿 黄昏ならんと欲するとき

これは孤閨をかこつ宮女の歌。韋莊の詞には「芳草」という語が数多く使用されており（「付録」の表10）、詩に多く「芳草」を詠じたのは、詞の製作と恐らく関係がある。

更にまた、五代の李中の『芳草』<sup>12</sup>と題する作品は、次のようなものである（なお、『芳草』と題する詩がこの時代になって初めて出現したことは、すでに述べた）。

二月正綿綿 二月 正に綿綿たり

離情被雨牽 離情 雨に牽かる

四郊初過雨 四郊 初めて雨の過ぎ

万里正鋪煙 万里 正に煙の鋪く

眷恋殘花惹 眷恋として殘花は惹き

留連醉客眠 留連として醉客は眠る

飘香是杜若 飘香は是れ杜若なり

最憶楚江辺 最も憶わるるは楚江の辺

時は二月、春の真々盛り、「綿綿」と続く「芳草」、それに「牽か」れる「離情」の人とは、「留連として眠る醉客」とともに作者を指すであろう。彼は九江の人である。<sup>43</sup>この詩がどこで作られたのか、詩の内容からは分からないが、九江以外の江南の異郷であることは間違いない。後述するとおり、彼は南唐に仕え、江南の各地を転々としていた。故郷を離れている彼は、けだるい春愁に耽溺しながら、辺りに漂う杜若（かおり草の一種）のかおりに陶醉しているのである。この詩においても、「芳草」が「離情」の人をも引きつける不思議な力を持っていると、歌われていることが確認できる。李中にはこの外に、次のような詩がある。

睡覺花陰芳草軟 睡りより覚むれば 花陰の芳草は軟し

不知明月出牆東 知らず 明月の牆東より出でしを

醉臥如茵芳草上 酔いて臥す 茵の如き芳草の上

覚来花月影籠身 覚め来れば 花月 影は身を籠む

前者は『酒醒』<sup>44</sup>、後者は『思胸陽春遊感旧寄柴司徒五首（其一）』<sup>45</sup>と題する詩である。「芳草」は、眠りのために心地よい場所を提供してくれるというのである。もっとも、これは李中の独占物ではない。白居易が『和新楼北園偶集（以下省略）』と題する詩において、次のように歌っている。

芳草供枕藉 芳草 枕藉を供し

乱鶯助諠譁 乱鶯 諠譁を助す

だが、李中は「芳草」に完全に眠り呆け、酔い痴れている。彼は淮西の巢令をしていたとき、後周の南侵に遭遇し、新たに後周に仕えることになったが（顕徳五年 九五八）、顕徳六年、許されて南唐に帰った。以後、南唐に仕え、新塗の巢令や吉水の巢尉になり、あるいは新喻・安福・晋陵などの巢において役人生活を送った。<sup>47</sup>彼の経歴も時代の変動に應じて、落ち着いたものではなかったのである。「残陽 影裏 水は東に注ぎ、芳草 煙中 人は独り行く」、<sup>48</sup>「西園 雨過ぎ 好花は尽き、南陌 人稀に 芳草は深し」<sup>49</sup>が「驚人泣鬼の語」と評されて、『唐才子伝』中に引用されているのは、おそらく偶然ではない。彼の詩には「芳草」が目につくのである。

## 第五節 「芳草」と楚辞

第四節に引用した李中の『芳草』詩の最後の一聯に、「飄香は是れ杜若、最も憶わるるは楚江の辺」と歌われている。これは『楚辞』「九歌・湘君」に「芳洲の杜若を采り、將に以って下女に遺らんとす」、同じく「湘夫人」に「汀洲の杜若を采り、將に以って遠き者に遺らんとす」、また同じく「山鬼」に「山中の人は杜若を芳らせる」とあるように、屈原に思い及んでいるのだが、表1に示しておいたとおり、『楚辞』は「芳草」史上、五代に次いで高い使用率を持っている。晩唐から五代にかけての時代は、世界が分裂した状態にあるという点で、戦国時代の状況と通じるところがある。晩唐五代時代の人々が「芳草」を好んだ背景に、自己の信念を貫いた屈原に対する、屈折してはいるが、共感が働いていたことは、十分考えられる。十國・閩の黄滔のごときは、『芳草』<sup>50</sup>と題する詩において、「沢国 芳草多く、年年 長えに自ら春なり。応に屈平従り後、更に不帰の人を苦しむべし」と、屈平（原）と「芳草」の関係をはつきり歌っている。

更に『離騷』の中に、主人公が五人の美女、宓妃・有娥の女（簡翟・建疵）・有虞の二姚を求めさまよったが、結

局彼女たちに絶望し、「世は溷濁して賢を嫉み、好んで美を蔽いて悪を称う」と詠嘆した、有名なくだりがあり、この部分に続いて、占い師・靈氛の次のような言葉が記されている。

曰両美其必合兮

曰く 両美は其れ必ず合わんも

孰信修而慕之

孰れか修を信じて之れを慕わん

思九州之博大兮

思えば九州の博大

豈唯是其有女

豈に唯に是こにのみ其れ女おんな有らんや

曰勉遠逝而無狐疑兮

曰く 勉めて遠逝して狐疑すること無かれ

孰求美而积女

孰れか美を求めて女ななこを积てん

何所独無芳草兮

何れの所か独り芳草無からん

爾何懷乎故宇

爾 何ぞ故宇を懷うや

「芳草」はどこにでもある。だから故国の楚にのみ固執せず、「遠逝」して探し求めればよい、ということであるが、「芳草」が美人にたとえられているのは、注意すべきことである。よく知られているとおり、王逸以来、「美人香草」と総称して「芳草」を「賢芳の君」（王逸『楚辞注』）などの比喩と解釈する学者が多い。しかし、「芳草」の句が「豈に唯に是こにのみ其れ女有らんや」と同じ意味であるからには、少なくとも表現的には、「芳草」と女性「草」を考えると、この点から言っても、『楚辞』を無視することは出来ない。

『楚辞』に関連して、更にもう一例具体例を挙げておこう。羅鄴は、初めて『芳草』と題して詩を作った人であり、しかも二首作った。このふたつの詩には彼の「芳草」に対する思い入れの深さが感じられるが、その内『才調集』（巻八）にも採録されている一首は、次のような作品である。

麿苑牆南殘雨中 麿苑 牆南 殘雨の中

似袍顔色正蒙茸 袍に似たる顔色 正に蒙茸たり

微香暗惹遊人歩 微香 暗に惹く 遊人の歩みを

遠緑纒分鬪雉蹤 遠緑 纒かに分かつ 鬪雉の蹤を

三楚渡頭長恨見 三楚渡頭 長えに見るを恨み

五侯門前却難逢 五侯門前 却って逢い難し

年年縱有春風便 年年 縦い春風の便有りといえども

馬跡車輪一萬重 馬跡 車輪 一萬重

右の詩のうち、「三楚」は三閭大夫・楚の屈原、「五侯」は後漢の同時に諸侯に封ぜられた五人の宦官を指す<sup>51</sup>。既に述べたとおり、羅鄴は「閑門にも要路にも 一時に生ず」と「芳草」を歌った。しかし、右の詩においては「五侯門外 却って逢い難し」と詠じた。なぜか。「楚辭」「九章・惜往日」に、「君は度無くして察せず、芳草をして蔽幽為らしむ」などと歌われているように、「芳草」は、正義に生き、悲劇に終わった屈原を象徴する誇り高いかおり草である。それに対して、宦官は汚らわしい存在である。この誇り高いものと汚らわしいものとは、本来相容れるはずがないからである。屈原は、かつて確かに存在した英雄であった。羅鄴が「芳草」を好んだ理由に、悲劇の英雄・屈原に対する同情、裏返して言えば、当局者に対する批判もあったと思われる。また、文宗の大和九年（八三五）に起こった「甘露の変以来、宦官の勢力が一層強大になった<sup>52</sup>」のは、周知のことであるが、「五侯門前」の句は、恐らく後漢は靈帝時代の鄺炎の『見志詩』（『後漢書』卷八十下「文苑伝下」）「靈芝 河洲に生じ、動揺するは洪汲に因る。蘭采 一に何ぞ晚き、蔽霜 其の柯を瘁る。哀しい哉 二芳草、太山の阿に植えず」を意識したものと思われる。後漢も宦官が朝廷に巣くっていた時代である。更にまた、末句の「馬車」に踏みにじられる「芳草」が羅鄴自身の姿

でもあることは言うまでもない。第二節で述べたとおり、彼は科挙受験のために一生を棒に振った人物である。なお余談ながら、この時代の人々が「芳草」を好んで歌った背景には、この時代、人々の多くが「芳草」に富む南方において生活を体験していたことも預っていたと思われる。第四節と第五節に取り上げた杜牧・韋莊・羅鄴・李中、すべてしかりである。

本論のしめくりとしては、冒頭に引用した杜牧の『池州春送前進士蒯希逸』詩を見ておかなければならないであろう（この詩は、会昌六年八四六、四十四歳の時の作。繆越『杜牧年譜』）。

芳草復芳草 芳草 復た芳草

断腸復断腸 断腸 復た断腸

自然堪涙下 自然に涙の下るに堪えたり

何必更残陽 何ぞ必ずしも更に残陽ならん

楚岸千万里 楚岸 千万里

燕鸿三两行 燕鸿 三两行

有家婦不得 家有るも帰ることを得ず

况举别君觴 況んや君と別るるの觴を挙ぐるをや

「芳草」から望郷への連想ということについては、既に述べた。ところで第三句は、春になって「芳草」のかおりが辺り一面にたちこめる眼前の光景は、「断腸」の思いをいやが上にもかきたてるものであり、「自然に涙の下る」条件として申し分がないという意味であるが、作者が「芳草」という語を重ねて表現したとき、彼は「芳草」のかおりのために、心的弛緩状態に陥って、望郷の思いに耐えかねているのである、と私は考える。また「池州」は広義に考えて、昔の楚の国に属する町であり（馮集梧注を参照）、「楚岸 千万里」と表現したとき、第一句の「芳草」か

ら考えて、彼の心の中には、屈原の姿が浮かんでいたであろう。屈原も異郷をさまよう人であった。

### 結語 「芳草」の文学史的意義

以上に述べたことをまとめれば、この時代、不安定な政治・社会的状況を前にして、多くの人々は閉塞的な状態におかれていた。それに対して私的な場面において、一時、酒に酔うがごとく「芳草」に陶醉すること、すなわち精神的にきわめて弛緩した状態に我が身をおくことによって、この不確実な時代を生き抜こうとした。晩唐から五代における「芳草」の一種マニアックな使用は、その現われであるといえるのではないだろうか。それは図らずも「芳草」という言葉と、精神的に安定したものを求めていたこの時代の人々の心とが一致したということである。

「芳草」を考えるとき、『楚辞』の存在を無視することができないことは、本論において指摘した。「芳草」と『楚辞』との関係について、既に志村良治博士が「芳草」一語にとらわれず大きな視野から、『舜祭」と古歌謡——「匂い」の文学の起源<sup>53</sup>』と題する論文において、詳細に論じ尽くされた。博士はこの論文の中で「結び」の一つとして、「これらの歌謡は、祭祀の場の歌舞の際に歌われたと見られる」、「なお巫の信仰をうかがうことができ、宗教性はつよく残っていると考えられる」と述べられた。また別の箇所において「香草の多用は楚辞においてひとまず終息すると言うことができよう」とも述べられた。私のこの報告は、ただ「芳草」という一語に限った、きわめて視野の狭いものであるが、右の博士の見解を受けて私流に解釈すれば、「芳草」は本来、その匂いによって天上の神を慰めるものであり、そのことによって人間の幸福を得るためのものであった。そして「芳草」は「楚辞においてひとまず終息」したが、この時代になって復活した。しかしそのとき「芳草」には、恐らく「巫の信仰」も「宗教性」も完全に消え去り、「芳草」は直接的に地上の人間と関係を結ぶものに変化していた、ということになる。仮にもし



神的なものからの離脱、それに伴う人間的なもの確立が人間の歴史的過程であるとすれば、「芳草」という言葉にも、その跡をうかがうことができるのであり、私の調査に大きな間違いがなければ、「芳草」が詩というジャンルにおいて担った如上の役割は、この時代を以って終焉した。

現実はいつの時代においても多様で複雑である。この時代、人々はすべて「芳草」に酔い痴れていたというつもりはない。彼らの中には知識人（士大夫）として、深刻な現実を誠実に直視し、重税に苦しむ農民の姿を文学に結晶させた人々があり、「占める数量は微少であるけれど、精彩に乏しくない」<sup>54</sup>作品が残されている。<sup>55</sup>二三例を挙げれば、皮日休「正楽府十編」<sup>56</sup>、聶夷中「詠田家」<sup>57</sup>（一作「傷田家」）、杜荀鶴「山中寡婦」<sup>58</sup>（一作「時世行」）など。またこの小論に取りあげた詩人たちはいつも、現実から目を背けていたというのではない。例えば韋莊の「秦婦吟」<sup>59</sup>は、黄巢の乱における長安の悲惨な状況を詠じた七言古詩、二百三十八句、千六百六十六字（鈴木虎雄『中國戦乱詩』筑摩書房による）にも及ぶ巨篇である。しかし、三千有余年にわたる文学史を通過した時、「芳草」という語が、晩唐五代に突出していることは否定できない。この時代の人々の心理の一面には、確かに「芳草」に対する異常な関心があったのである。更にまた、晩唐五代における「芳草」の流行を受け継ぐかのように、宋代に入ってから、詞において「芳草」は多用され、「芳草」は詞語として欠くことのできない言葉になった感がある（「付録」の表10参照）。この現象は、文学におけるいわば慣性の法則とでも解釈すればいいのである。だが、詞語として定着したということとは、この場合、「芳草」独自の生命は失われてしまったことを意味する。以上の点から言えば、「芳草」は晩唐五代時代の精神を徴表するものであり、この時代を「芳草」時代と呼んでよい。専門家の中には、この時期の文学的特徴を「朦朧（朧）」<sup>60</sup>という言葉で呼ぶ人がいる。この「朦朧」という評語は、私が論じた「芳草」に対する、この時期の詩人たちの感覚や意識のレベルで通じるところがある、と私は考える。「芳草」の異常な集中は、感覚（嗅覚）の「朦朧」な状態、つまり一種の麻痺を意味するからである。<sup>61</sup>

私がこの小論で言いたいことは以上であるが、なぜ、他ならぬ晩唐五代に「芳草」に対する関心が高まったのかという点については、一節を設けて論じることとはしなかった。私はこの点に関して、「芳草」という言葉の詩文学史における成熟、つまり「芳草」がこの時代になって頂点に達したということの外に、三点、第一点は詞の存在、第二点は開放的な男女関係、第三点は香料の普及を考えている。しかし、私の考えはまだ十分に熟していない。よってこの問題については、いずれ改めて考えてみることにする。

### 注 釈

- 1、『樊川詩集』卷三。詩題の刪希逸は字を大隱といい、武宗の会昌三年（八四三）の進士。『唐摭言』卷三「慈恩寺題名遊賞賦詠雜記」参照。なお、索引を利用した詩人は、本詩集から引用した。
- 2、『全唐詩』第十函第九冊。
- 3、検索に当たっては、『毛詩引得』（哈佛燕京学社引得特刊第九号）、竹治貞夫編『楚辞索引』（台湾中華書局）、および松浦崇編の一連の「索引」シリーズを利用した。索引のないものは、退欽立輯『先秦漢魏晉南北朝詩』（中華書局）を底本にした。
- 4、共に『文淵閣四庫全書』本。
- 5、『全唐詩』第五函第四冊。この詩は詩題が示す通り、上から題を与えられて作られた作品である。
- 6、『全唐詩』第二函第七冊。
- 7、『唐末五代』（『宮崎市定全集』五代末初）初収 二九五頁 岩波書店（一九九二年）。
- 8、『新五代史』卷十六「唐廢帝家人伝贊」。
- 9、『全唐詩』第十函第三冊。
- 10、『唐才子伝』卷八（『四庫全書』本）。
- 11、『五代十国史研究』（八五頁 上海人民出版社 一九九一年）。また『廿二史劄記』参照。
- 12、羅邨は咸通年間（860—874）、少なくとも十年間、科擧を繰り返して受験していた。拙論「新歳時記Ⅱ春の巻」（『季

- 刊中国 No.36』所収)参照。
- 13、『全唐詩』第十二函第九冊。なお第三句の「遠水」の「水」は「川」に通じ、「川」は原を意味するであろう(張相『詩詞曲語辭匯釈』卷六「川」の条を参照)。
- 14、『全唐詩』第十二函第九冊。
- 15、『宋史』卷四百四十一「本伝」。
- 16、『全唐詩』第十一函第五冊。また『徐公文集』卷一。なおこの詩の正確な製作年次は分からないが、陳振孫『直齋書錄解題』(卷十七「別集類中」「徐常侍集三十卷」)によれば、前半の二十卷は江南に仕えていた時の作であるというから、内容から考えて呉に初めて出仕した時の作であろうか。
- 17、『宋史』「本伝」。
- 18、『全唐詩』第三函第一冊。
- 19、『全唐詩』第十函第五冊。
- 20、『全唐詩』第十一函第五冊。
- 21、『古詩十九首釈』(『朱自清古典文学專集之二 古詩歌箋三種』所収 二四三・二四四頁 上海古籍出版社 一九八一年)。
- 22、『李煜』四二頁(中國詩人選集16 岩波書店)。
- 23、『全唐詩』第九函第二冊。
- 24、『三体詩素隱抄』参照。作者孟暹も「蘼蕪」を「当帰」の別名として歌っているが、ただし、『素隱抄』が「蘼蕪ハ当帰ソ」といいながら、もう一方では「蘼蕪ハ当帰デハナイソ。当帰ニ似タモノソ」といっているとおり、実際には後者のほうが正しい。『本草綱目』「草部」第十四卷「草之三」の「当帰」草の項の「釈名」に、「山蘼」・「白蘼」とあり、また同じく「蘼蕪」の「釈名」に、「蘼蕪」・「江蘼」とある。この後者に対して、李時珍は次のように説明した。「蘼蕪、一に藥蕪に作る。その莖葉は靡弱にして繁蕪す、故に以て之に名づく。当帰は蘼と名づけ、白芷は蕪と名づく。其の葉は当帰に似、其の香は白芷に似たり。故に蘼蕪・江蘼の名有り。」
- 25、『樂府詩集』卷四十四。
- 26、小南一郎「南朝の恋歌——『西洲曲』を中心として」(『中国文学報 第二十三冊』所収。三三頁 一九七二年十月)。
- 27、『全唐詩』第九函第六冊。

- 28、『全唐詩』第二函第九冊。  
 29、『樊川詩集』卷三。  
 30、謬鉞『杜牧年譜』（人民文學社出版 一九八〇年・北京）。  
 31、『樊川詩集』卷一。  
 32、謬鉞『杜牧年譜』。  
 33、山内春夫「杜牧の抒情性」（『杜牧の研究』所収 二〇八頁 彙文堂 昭和60年）。  
 34、『全唐詩』第十函第九冊。又『浣花集』卷第五。なお「如幻如泡世」の句には、仏典『金剛般若波羅密經』の「一切有為法、如夢幻泡影、如露亦如電、応作如是觀」の影響があるだろう（『大正新脩 大藏經』第八卷七五二・七五七頁）。  
 35、『唐才子伝』卷十。  
 36、『遺興』詩を挟んで、前に「李氏小池亭十二韻」詩があり、自注に「時在婺州寄居作」とあり、後に「婺州和陸諫議將赴闕懷陽羨山居」と題する詩がある。韋莊の繫年は、夏承燾『韋端己年譜』（『唐宋詞人年譜』所収 上海古籍出版社 一九七九年）による。  
 37、『全唐詩』第十函第九冊。  
 38、『全唐詩』第十函第九冊。  
 39、『中国通史 第四冊 晚唐詩人和詞人』（三二六頁 人民出版社 一九七八年版）。  
 40、李商隱『謝河東公和詩啓』（『樊南文集詳註』卷四）の文。  
 41、『花間集』卷三。  
 42、『全唐詩』第十一函第五冊。又『碧雲集』卷中。  
 43、『唐才子伝』卷十。  
 44、『全唐詩』第十一函第五冊。又『碧雲集』卷下。  
 45、『全唐詩』第十一函第五冊。又『碧雲集』卷下。  
 46、『白氏長慶集』卷五十二。  
 47、傅璇琮主編『唐才子伝校箋』（中華書局 一九九〇年）。  
 48、『江辺吟』（『全唐詩』第十一函第五冊。又『碧雲集』卷上）。

- 49、『暮春有感寄宋維員外』（『全唐詩』第十二函第五冊。又『碧雲集』卷中）。なお、楊明氏によれば、晚唐五代時代における詩格書の類に、律詩が引用される場合、「往々にして第二聯の句である」（『中晚唐における律詩の發達の反映』『未名第12号』所収）。本文に引用した李中も、この例にもれない。
- 50、『全唐詩』第十函第十冊。又『黃御史公集』卷四。
- 51、『後漢書』卷七十八「宦者列伝・単超伝」。
- 52、羅宗強著『隋唐五代文学思想史』（三四五頁 上海古籍出版社 一九八六年）。
- 53、『志村良治博士著作集I 中国詩論集』所収（汲古書院 昭和六十一年）。
- 54、羅宗強著『隋唐五代文学思想史』（四〇〇頁）。
- 55、また王士禛著『唐代詩歌』（『中唐和晚唐詩人』（人民文学出版社 一九五九年・北京）、鄧小軍著『唐代文学的文化精神』第十章 晚唐詩：從幽情的追尋致風骨的挺立』（天津出版社 民國八十二年）参照。
- 56、『全唐詩』第九函第九冊。又『皮子文藪』卷十。
- 57、『全唐詩』第十函第一冊。
- 58、『全唐詩』第十函第八冊。
- 59、王重民 孫望 童養年 輯録『全唐詩外編上』第一編 補全唐詩（中華書局 一九八三年）。
- 60、例えば袁行霈『在沈淪中演進——試論晚唐詩歌創作趨向』（『中華文史論叢 第四十八輯』所収 上海古籍出版社 一九九一年）。
- 61、ここに北宋時代の作品をふたつ紹介しておく。「花間水畔綠如茵、興廢曾經漢与秦、占了山川無限地、愁傷今古幾何人、嚴霜殺尽還逢雨、野火烧殘又遇春、不那路傍多此物、農家長是費耕耘」。『芳草知誰種、綠階已數叢、無心与时競、何苦綠葱忽」。前者は邵雍の『芳草短吟』（『伊川擊壤集』卷六）、後者は王安石の『芳草』（『臨川先生文集』卷二十六）と題する詩である。王安石の作品について、吉川幸次郎博士は、「すべてにおいて鋭敏で深辯であった彼の自画像として、読める」と言われた（『宋詩概説』二二六頁 岩波書店 中国詩人選集第二集一）、右の二首にみられるような、輪郭が明瞭で、健康にみちあふれた、いわば野性児のごとき「芳草」は、晚唐五代にはまざるべきでないものである。北宋という新しい時代が生んだ新氣象と言うべきである。

(表10)

人 名	芳草	*草	占有率
* 温庭筠	4	8	50
* 韋 莊	7	7	100
* 李 煜	2	3	67
* 馮延巳	5	9	56
柳 永	6	11	55
張 先	4	10	40
歐陽修	8	12	67
晏幾道	6	18	33
蘇 軾	11	16	69
秦 觀	3	15	20
周邦彥	4	13	31
賀 鑄	17	22	77
李清照	1	4	25
陸 游	3	5	60
范成大	1	2	50
趙長卿	12	16	75
辛棄疾	15	38	39
史達祖	6	11	55
姜 夔	3	10	30
劉克莊	2	7	29
吳文英	6	20	30
張 炎	6	23	26

(張炎は「瑤草」の数8で、「芳草」より多い)  
(\*印は晩唐五代詩人)

(表7補)

尊前集	芳草	*草	占有率	春草	占有率
李 白	0	2	0	0	0
韋応物	0	2	0	0	0
王 建	0	2	0	1	50
劉禹錫	1	3	33	2	66
白居易	0	1	0	0	0
張志和	0	1	0	0	0
小 計	1	11	9	3	27
温庭筠	0	1	0	0	0
韋 莊	1	1	100	0	0
李 王	1	2	50	1	50
馮延巳	3	3	100	0	0
小 計	5	7	71	1	14
合 計	6	18	33	4	22

付録

(表9)

時代	唐以前	初唐	盛唐	中唐	晩唐	五代
占有率	17	32	31	26	41	68

唐代平均	北宋	南宋	金	元	明	清
32	21	21	18	21	24	21

(芳草と春草を合計した占有率)

中唐	芳草	* 草	占有率	春草	占有率
錢起	7	34	21	6	18
韓翃	7	19	37	2	11
皇甫冉	13	32	41	2	6
顧況	0	28	0	3	11
耿湣	6	27	22	2	7
戴叔倫	3	17	18	1	6
盧綸	1	18	6	1	6
李端	5	27	19	2	7
司空曙	3	18	17	0	0
王建	0	14	0	1	7
武元衡	1	10	10	1	10
權德輿	3	13	23	2	15
韓愈	1	12	8	2	17
劉禹錫	1	41	2	5	12
孟郊	3	30	10	2	7
張籍	0	17	0	2	12
李賀	1	17	6	4	24
元稹	2	34	6	1	3
白居易	5	94	5	13	14
李紳	3	15	20	2	13
姚合	3	20	15	4	20
合計	68	537	13	58	11
その他	37	206	18	23	11
総計	105	743	14	81	11

(個人別表)

初唐	芳草	* 草	占有率	春草	占有率
劉希夷	0	11	0	4	33
張說	2	11	18	0	0
合計	2	22	9	4	18
その他	13	88	15	11	13
総計	15	110	14	15	14

盛唐	芳草	* 草	占有率	春草	占有率
王維	2	23	9	9	39
李頎	5	20	25	4	16
儲光羲	2	13	15	1	8
王昌齡	0	13	0	2	15
劉長卿	14	96	15	32	33
李白	5	100	5	12	12
韋應物	9	42	21	4	10
岑參	1	46	2	10	22
李嘉祐	6	16	38	1	6
杜甫	2	68	3	12	18
合計	46	437	11	87	20
その他	14	46	24	5	11
総計	60	483	12	92	19

五代	芳草	* 草	占有率	春 草	占有率
李 中	19	26	73	0	0
徐 鉉	7	12	58	0	0
合 計	26	38	68	0	0
その他	12	53	23	5	9
総 計	38	91	42	5	5

北 宋	芳草	* 草	占有率	春 草	占有率
王禹偁	3	16	19	3	19
林 逋	7	15	47	0	0
蘇舜欽	0	11	0	0	0
司馬光	2	31	6	1	3
文 同	1	15	7	0	0
曾 鞏	1	12	8	0	0
梅堯臣	5	105	5	5	5
邵 雍	15	28	54	1	4
歐陽修	4	42	10	0	0
王安石	6	50	12	4	8
蘇 軾	4	57	7	3	5
蘇 轍	4	59	7	5	8
黃庭堅	0	19	0	2	11
張 耒	28	96	29	12	13
秦 觀	4	13	30	0	0
釈惠洪	5	21	24	1	5
晁補之	2	23	9	2	9
合 計	91	613	15	39	6

晚 唐	芳草	* 草	占有率	春 草	占有率
杜 牧	12	26	46	2	8
許 渾	7	29	24	7	24
李商隱	3	22	15	0	0
馬 戴	5	13	38	0	0
薛 能	2	10	20	1	10
李群玉	4	15	27	1	7
賈 島	3	19	16	4	21
溫庭筠	10	57	18	10	18
劉 滄	8	17	47	4	24
儲嗣宗	2	10	20	1	10
陸龜蒙	1	12	8	2	17
胡 曾	3	14	21	2	14
羅 鄴	9	10	90	0	0
羅 隱	5	18	29	1	6
唐彦謙	3	11	27	2	18
韓 偓	2	17	12	2	12
吳 融	4	17	24	1	6
韋 莊	21	32	66	3	9
徐 夔	2	12	17	1	8
合 計	106	361	29	44	12
その他	50	250	20	28	11
総 計	156	611	26	72	12



元	芳草	* 草	占有率	春 草	占有率
耶律楚材	3	15	20	0	0
王 禪	2	95	2	17	18
戴表元	2	21	10	2	10
趙孟頫	4	29	14	2	7
劉 因	4	23	17	0	0
袁 桷	4	32	13	0	0
虞 集	5	27	19	2	7
揭徑斯	0	25	0	4	16
范 梈	7	28	25	0	0
吳 萊	4	34	12	1	3
黃 潛	5	28	18	1	4
柳 貫	3	27	11	0	0
薩都拉	11	43	26	7	16
張 雨	3	17	18	2	12
戴 良	0	22	0	1	5
倪 瓚	10	47	21	5	11
合 計	67	513	13	44	9

明	芳草	* 草	占有率	春 草	占有率
劉 基	19	121	16	5	4
貝 瓊	2	38	5	6	16
高 啓	21	85	5	1	1
吳 寬	14	53	26	6	11
王守仁	1	17	6	2	12
唐順之	8	26	31	1	4
* 徐 渭	3	26	12	0	0
* 周履軒	4	15	27	0	0
* 袁宏道	1	68	1	3	4
* 陳子龍	50	194	26	16	8
合 計	123	643	19	40	6

南宋	芳草	* 草	占有率	春 草	占有率
朱 熹	3	43	7	2	5
陳傅良	2	13	15	1	8
玉十朋	1	23	4	8	35
桜 鑰	4	31	13	2	6
洪 适	2	18	11	2	11
范成大	11	41	27	5	12
楊万里	4	101	4	14	14
* 陸 游	31	187	17	9	5
魏了翁	1	12	8	1	8
劉克莊	0	45	0	3	7
文天祥	8	34	24	2	6
合 計	67	548	12	49	9

金	芳草	* 草	占有率	春 草	占有率
趙秉文	1	14	7	1	7
元好問	0	32	0	9	28
* 王 寂	0	8	0	0	0
* 李俊民	0	8	0	0	0
合 計	1	62	2	10	16

清	芳草	* 草	占有率	春 草	占有率
顧炎武	0	24	0	2	8
黃宗羲	2	12	16	0	0
王夫子	13	127	10	9	7
錢謙益	15	82	18	10	12
吳偉業	8	46	17	10	22
王士禎	8	58	14	7	12
汪 琬	11	48	23	1	2
朱彝尊	18	113	16	8	7
朱昆田	1	14	7	1	7
陳其年	1	27	4	3	11
查慎行	14	129	11	10	8
厲 鶚	13	60	22	0	0
姚 鼐	5	43	12	4	9
全祖望	0	23	0	1	4
洪亮吉	14	100	14	8	8
孫星衍	4	22	18	3	14
錢大昕	1	29	3	1	3
阮 元	5	38	13	5	13
合 計	133	995	13	83	8

(資料は『四庫叢刊初編』、ただし\*印は『四庫全書』  
その他の資料による)

(一九九四年七月六日受理)